

第4回 国際日本学コンソーシアム

日 時	2009年12月15日(火)・16日(水)・17日(木)
場 所	お茶の水女子大学 (〒112-8610 東京都文京区大塚2-1-1) 15日 人間文化創成科学研究科棟(旧人間文化研究科棟)6階 大会議室(607号室) 人間文化創成科学研究科棟(旧人間文化研究科棟)5階 SCS室 16日 文教育学部1号館1階 大会議室 17日 人間文化創成科学研究科棟(旧人間文化研究科棟)6階 大会議室(607号室)
全体テーマ	「日本学研究はだれのものか？」 国際日本学コンソーシアムは、世界の日本学研究の拠点である8大学から教員および大学院生を迎えて、国際的・学際的なジョイントゼミを行い、日本学研究および教育の世界的ネットワークを構築するものです。このコンソーシアムの開催により21世紀における日本学研究・教育の国際的連携が一層進展し、緊密な協力関係が樹立されるものと確信しています。
参加校	カレル大学(チェコ)、同徳女子大学校(韓国)、国立台湾大学(台湾)、お茶の水女子大学(日本)、バドュー大学(米国)、淑明女子大学校(韓国)、北京外国語大学北京日本学 研究センター(中国)、ロンドン大学東洋アフリカ研究院 SOAS(英国)、パリ第7大学 (仏国)、ボン大学(ドイツ、特別参加) (アルファベット順)
主 催	お茶の水女子大学大学院教育改革支援プログラム「日本文化研究の国際的情報伝達スキルの育成」、女性リーダー育成プログラム(人社系)、比較日本学教育研究センター

プログラム

12月15日(火) 第1日目

10:00~	開会式 【会場】人間文化創成科学研究科棟6階 大会議室 【司会】森山新(本学)
13:00~	<日本語学・日本語教育学部会> 【担当】森山新(本学) 第一部 【会場】人間文化創成科学研究科棟6階 大会議室 【司会】王亜茹(本学大学院生) <u>戴政宇(国立台湾大学大学院生)</u> 「日中両言語における同じ漢字を用いた動詞の表すそれぞれの意味領域の差異に対する比較研究 —日本語動詞「飲む」と中国語動詞「飲」を中心に—」 <u>徐蓮(本学大学院研究生/北京日本学研究中心大学院生)</u> 「日本語と中国語における〈深淺〉の認知的対照研究」 <u>金世恩(同徳女子大学校大学院生)</u> 「韓国における日本語学研究的概観」 <u>イソ・アパコーン(本学大学院生)</u> 「タイ語と日本語の文末詞についての対照研究」 第二部 【会場】人間文化創成科学研究科棟6階 大会議室、5階 SCS室 【司会】王亜茹(本学大学院生) <u>徐一平(北京日本学研究中心)</u> 「日本語教育と日本学研究の関係」 <u>李徳奉(同徳女子大学校)</u> 「韓国における日本学研究のジレンマ—日本語学・日本語教育学を中心に—」 <u>大島弘子(パリ第7大学)</u> 「フランスにおける日本語教育と日本学」 <u>奥村三菜子(ボン大学)</u> 「なぜ日本語を学ぶのか—ドイツの現状・課題・展望—」(TV会議) ディスカッション

18:00～	懇親会 【会場】 マルシェ大ホール 【司会】 森山新 (本学)
--------	--

12月16日(水) 第2日目	
10:00～	<日本文学部会> 【担当】 菅聡子 (本学) 【会場】 文教育学部1号館1階 大会議室 午前の部 【司会】 川原塚瑞穂 (本学大学院生) <u>張文聰 (国立台湾大学大学院生)</u> 「一葉作品における近代性への架橋—『十三夜』を通して—」 <u>顔理謙 (国立台湾大学大学院生)</u> 「『青鞥』初期における平塚らいてうの思想—「元始、女性は太陽であった」を中心に—」 <u>曾玉蓉 (国立台湾大学大学院生)</u> 「森鷗外の歴史小説『最後の一句』における官僚批判の心理」 <u>范淑文 (国立台湾大学)</u> 「王維の文人画世界の痕跡—漱石の題画詩を例として—」 <u>Martin, TIRALA (カレル大学)</u> 「西洋は日本の美意識をどういう風に見ていたのか」 午後の部 【司会】 武内佳代 (本学大学院生) <u>関根英二 (パデュー大学)</u> 「読むことの実践—アメリカ日本文学会の現在—」 <u>申河慶 (淑明女子大学校)</u> 「大衆文化からみる BC 級戦犯裁判と「責任」」 <u>林姿瑩 (国立台湾大学大学院生)</u> 「大岡昇平の作品における戦争批判の意味—「靴の話」「食慾について」の改稿をめぐる—」 <u>金宝栄 (淑明女子大学校大学院生)</u> 「三浦綾子『氷点』論—戦後状況における原罪意識の芽生え—」 <u>池田太司 (パデュー大学大学院生)</u> 「稲垣足穂の模型：呪物としての複製」 <u>川原塚瑞穂 (本学大学院生)</u> 「津島佑子の文学—物語と記憶—」
15:30～	<歴史学部会> 【担当】 小風秀雅 (本学) 【会場】 人間文化創成科学研究科棟6階 大会議室 【司会】 小風秀雅 (本学) <u>Angus, LOCKYER (ロンドン大学 SOAS)</u> 「鎖国学からの脱出—日本学から現在学へ—」 <u>渡辺千尋 (本学大学院生)</u> 「日清戦後の居留地政策—天津日本専管居留地を中心に—」 <u>Jan, HAJNY (カレル大学大学院生)</u> 「軍隊組織による戦前日本の軍国化」 <u>Tristan, BRUNET (パリ第7大学大学院生)</u> 「昭和史論争の問題点—メタヒストリ—的分析—」 <u>和田華子 (本学大学院生)</u> 「ヴェルサイユ=ワシントン体制の誕生と日本」

12月17日(木) 第3日目	
10:00～	<p><日本思想学部会> 【担当】 頼住光子 (本学) 【会場】 文教育学部1号館8階 803号室 【司会】 工藤堯子、小林加代子 (本学大学院生) <u>高島元洋 (本学)</u> 「日本朱子学における敬の意味」 <u>頼住光子 (本学)</u> 「聖徳太子の片岡山説話についての一考察」 <u>鈴木朋子 (本学大学院生)</u> 「清沢満之の心理学講義及び試稿について」 <u>斎藤真希 (本学大学院生)</u> 「親鸞における往生」 <u>徳重公美 (本学大学院生)</u> 「徂徠学における<主体性>の考察」 <u>張可佳 (本学大学院生)</u> 「伊藤仁斎の生々観にみる形而上学」 <u>張彦麗 (北京日本学研究センター)</u> 「思想問題としての「日本学」」 <u>党蓓蓓 (北京日本学研究センター大学院生)</u> 「横井小楠の「開国論」と「堯舜三代の道」」</p>
14:00～	<p>全体パネルディスカッション・全体会議 【会場】 人間文化創成科学研究科棟6階 大会議室 【司会】 古瀬奈津子 (本学) 各部会報告 日本語学・日本語教育学部会 (発表者: 王亜茹) 日本文学部会 (発表者: 武内佳代) 歴史学部会 (発表者: 和田華子、芹澤良子) 日本思想学部会 (発表者: 徳重公美) 各大学との意見交換</p>

第4回の国際日本学コンソーシアムは3年間の大学院GPの締めくくりとして、「日本学研究はだれのものか?」を全体のテーマとして行われた。全体テーマは、専門部会の横のつながりを強化し、学際性を追求するという意味から昨年から導入されたものである。

1日目はまず開会式が行われ、学長が来日した参加者に本学を代表して挨拶を述べられた。続いて古瀬先生が大学院GPプログラムについての紹介、森山より全体テーマ「日本学研究はだれのものか?」について基調講演が行われた。午後は日本語学・日本語教育学合同部会、夜には懇親会が行われ、河村副学長が挨拶をされた。2日目は日本文学部会、歴史学部会が、3日目は日本思想部会が開催された。

3日目午後には、全体が一堂に会し、全体会議が持たれた。まず各部会で司会を務めるなど中心的な役割を担った院生(日本語学・日本語教育学: 王亜茹、日本文学: 武内佳代、歴史学: 芹澤良子・和田華子、日本思想: 徳重公美)による各部会の報告があった。このあと、今回のテーマである「日本学研究はだれのものか?」について、またコンソーシアムの継続・発展のためのディスカッションを行った。

今回のテーマである「日本学研究はだれのものか?」は、今後の日本学研究を考える上での様々な課題が内包されていた。何よりも「だれのものか?」について、これは日本学研究のグローバル化を意図した問いかけであり、日本は教え、発信する側、海外の日本学研究者は学ぶ側といった構図からの転換が必要であることを意味していたが、海外から参加した大学院生のほとんどにとっては、この問いかけが何を意味しているのか自体、理解しにくいものであった。しかしこのような問いかけは国内外で日本学研究を行うすべてのものにとって多角的視点からの研究を促進するものであり、その点について議論が行われたことは有意義であった。次に「日本学研究」とは何かという点も議論となった。ヨーロッパにおいては「日本学 (Japanology)」と「日本研究 (Japanese Studies)」を使い分けており、「日本学研究」という用語はあまり用いられない。また日本語学、日本語教育学研究は含まれないこともある。これに対し韓国、中国などでは日本学といえどむしろ日本語学・日本文学が中心であり、現代の日本学研究はそれから拡大しつつある。そのため日本語学や日本語教育学を含めた5つの部会がネットワークを組んで行われたこのコンソーシアムはそれ自体意味を

持っており、その学際化は参加者の注目を集めることとなった。またロキア氏（ロンドン大 SOAS）は日本学は鎖国化、ゲッター化状態からの脱却が必要であるとの主張もあり、さらなる学際化、国際化を求めた。

最後に今後のコンソーシアムの行方について話し合われた。参加者からはこのようなコンソーシアムはほかに例がなく、来年度以降も継続してほしいという意見が強く出された。来年度以降も継続、発展するためには、①予算の確保、②TV 会議などを導入したサイバーコンソーシアムの拡大、③海外開催の可能性の模索などが必要であることが提案された。②については前回ヴァッサー大、今回ボン大学との間で成功しており、また台湾大学とは既にジョイントでのゼミが行われた実績もある。パリ・ディドロ大、チェンマイ大、北京大なども TV 会議システムを有しており、今後 TV 会議でのジョイントゼミを拡大しながら徐々にコンソーシアムのネットワークを拡大できればと思っている。また日本学研究の視点をさらに多角的なものとしていくためにも海外での開催を積極的に検討する必要がある。

【文責：本学比較日本学教育研究センター長 森山 新】

